

## 答志島桃取町の滞在型漁業体験研修

3月8日(木)より2泊3日で、答志島桃取町にて滞在型漁業体験研修が行なわれ環境情報学部2年生の男子学生3名(浅井雄大さん、岡田勘汰さん、平野智也さん)が参加した。この取組みは桃取町が進める「桃取元気プロジェクト」の一環である。答志島は鳥羽市にある離島の一つで、桃取町は答志島の西側に位置する漁業の町だ。この地域にある奈佐の浜は伊勢湾のゴミが集中的に集まる場所として有名で、海岸清掃活動に教員や学生が参加したことを契機に環境情報学部と繋がりができた。また、この付近では、陸から海に入った栄養も集まるため、答志島付近は伊勢湾の有数の豊かな漁場として知られており、プロジェクトは6年前から実施され、アマモ場再生、婚活、漁業研修などが行われている。この漁業体験は、これから社会に出る若者が、地域問題を肌で感じ、ほとんど知る機会のない漁業の実情を知ることが、大変役に立つと考え、是非にとお願いし実現した研修である。特に、参加した3名は自然環境を専攻しており、伊勢湾の環境問題と地域社会の関係を学ぶ機会にもなると考えた。

3月8日(木)に答志島に渡り、2泊3日で漁業を中心とした活動に取り組んだ。この期間はあいにくの雨風模様で、時化ていたために海に出ることはできなかったものの、8日はワカメの加工(葉と茎を分離する作業)、9日は乾燥ワカメの作成とカキ剥きを体験した。漁業組合員ご一家の加工場にお邪魔して、世間話をしながらの仕事は新鮮で、楽しい体験となった。鳥羽磯部漁協桃取支所の小浦嘉門理事には、学生の仕事の確保から、夕食の食材の準備、魚貝類をふんだんに使った夕食の作り方の指導まで、何から何までお世話になり、大変楽しい時間となった。



滞在型漁業体験研修の様子は、  
こちらのアドレスにて、動画(YouTube)でご確認いただけます⇒



## おもてなしロボット CORON の実証実験に、留学生が参加

2月19日(月)、おもてなしロボット CORON を開発した株式会社フランチャイズアドバンテージの実証実験として行われた春節キャンペーンイベントに、岡良浩准教授(総合政策学部)のゼミの留学生4名が参加した。実証実験にご協力いただいたのは、鳥羽(相差)の海女小屋「はちまんかまど」と伊勢(二見)の安土桃山城下街の2つの観光施設で、おもてなしロボット CORON を持ち込み、学生とともに、インバウンド観光客向けに使い、その効果を実証するという実験だ。海女小屋「はちまんかまど」では、アジア・西欧から、たくさんの外国人旅行者が来られており、中国語や英語を話すことができるロボットに、想像以上に外国人旅行者が反応を示していた。

安土桃山城下街の方は、残念ながら旅行者は少ない時期であったが、役者さんが次々に訪れてくださった。また学生自身も、忍者の姿に変装して参加させていただいた。まだまだ改良の余地はあるが、十分使えるロボットであることが確認できた。

なお、おもてなしロボット CORON は、本学の「おもてなし経営実践プログラム」の中で、授業として導入し、今後、地域の事業者さまの協力を得ながらアクティブラーニングの一つとして活用していく。



これまでの Pick Up Topics は、ホームページでご覧いただけます。  
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/examinee/topic.html>

 文部科学省 **地(知)の拠点** Pick Up Topics には、COC事業における記事が含まれています。

学校法人 暁学園 四日市大学

【発行】入試広報室

〒512-8512 三重県四日市市萱生町1200

TEL:059-365-6711 FAX:059-325-7218

<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

<http://smile.yokkaichi-u.ac.jp/> (受験生サイト)



P.1・フィリピンセブ島語学研修を実施

P.2・タイ・スタディツアーを実施  
・わかもの学会と地域連携フォーラムを同日開催

P.3・三重県警察本部から感謝状を受けました  
・尾鷲の火力発電所などを見学  
・十四川、海蔵川および竹谷川を調査

P.4・答志島桃取町の滞在型漁業体験研修  
・おもてなしロボット CORON の実証実験に、留学生が参加

## フィリピンセブ島語学研修を実施

2月11日(日)より2週間、本学の学生がフィリピンのセブ島にて語学研修に参加した。  
～以下、引率を担当した四日市大学の山本伸教授(環境情報学部)による研修レポート～

【セブ島語学研修レポート】

「マガンダン・ガビー！」これはタガログ語の「こんばんは」の挨拶です。この言葉に迎えられ、2月11日(日)の夜遅く、本学の学生11名はセブ島の空港に降り立ちました。セブ島のあるフィリピン共和国の母語は先のタガログ語やビサヤ語であって英語ではないのですが、1947年までの半世紀余りの間、アメリカの植民地であったことから英語は第2言語として認知され、フィリピン人の多くは英語が話せます。そんなこともあって、フィリピンはいまやアメリカやイギリス、カナダやオーストラリア、ニュージーランドといった英語圏に次ぐ準英語圏国として、英語研修受け入れ先としての注目が高まっています。実際、私たちが到着したときにはもうすでに韓国や台湾、そして日本からの学生たちでキャンパスはごった返していました。セブ島英語研修は、1日8コマ(1コマ50分)のうち6コマはマン・ツー・マン授業で行われます。つまり、授業の75パーセントが個別授業であるため、英語に自信のない学生でも他の学生に気後れすることなく、また常に自分のレベルに合った内容と進度の授業を受けることができます。実際その効果はてきめんで、1週間もすれば「英語が聞き取れるようになってきた気がする」、「自然に英語



が出てきて驚いた」などといった声があちこちから上がりはじめました。朝8時から午後4時50分までのハードな時間割にもかかわらず、あっという間に1週間が過ぎて迎えた週末、学生たちは「アイランド・ホッピング」と呼ばれる島めぐりに出かけました。そして、カヌーのような舟で二つの島をめぐりながらシュノーケリングやバーベキューを楽しみ、日本の7倍といわれる紫外線で真っ黒に日焼けしたのです。さて、いよいよ帰国の時。学生たちは先生たちや日本の他大学の学生さんたちともすっかり仲良くなり、LINEを交換したり再会の約束をしたりと名残を惜しみつつも2週間の授業をやり遂げた満足感のなかで修了式に臨みました。というわけで、今回のセブ島英語研修は予想を上回る成功を収めて終了しました。よくわかるマン・ツー・マン授業、明るくて親切なフィリピン人の先生達、日本の他大学の学生さん達との出会い、美味しい料理、そしてきれいな海。「また来たい!」、「絶対にまた来る!」という学生たちの宣言にも似た力強い叫びを聞くにつけ、あらためて今回の研修がどれほど大きな影響を彼らに与えたかを実感しながら、私自身、さらに多くの後輩学生に同じ気持ちを味わわせたいという野心に駆られたのでした。「マガンダン・ガビー!」。来年もまた、この言葉に迎えられることができるよう、実施に向けて万全の準備を重ねたいと思います。(環境情報学部教授 山本伸)

セブ島語学研修での様子は、四日市大学受験生サイト

「smile 四日市」の特設ページにて、ご覧いただけます。⇒





## タイ・スタディツアーを実施

2月27日（火）から3月6日（火）まで、タイ・スタディツアーを実施した。この研修（全学共通教育科目「国際協力研修」）は、青年海外協力隊、国際ボランティアなど、国境を終えた社会貢献活動を学ぶことを目的とし、今回は、環境情報学部から6名、総合政策学部から5名が参加した。



タイ北部チェンライで、タイ山地民の教育支援・農業支援を行なう「暁の家」（代表中野穂積氏：三重県出身）の活動内容を知るとともに、山のパーッキヤ村ではホームステイをし、村の実際の生活を体験することができた。このほか、プラオ郡にある堀内佳美さんの図書館活動拠点であるランマイ図書館を訪問した。堀内さんはタイの子供たちに本の楽しさを広めるために、図書館をつくり、そして移動図書館やワークショップ、幼児教育の活動を行っている。また、日本語学校を訪問した際には、タイ学生の日本語への関心の高さに、学生は驚いていた。タイでのこうした経験が学生たちの今後の研究活動に、どのように反映されるか楽しみだ。

タイ・スタディツアーの様子は、四日市大学受験生サイト「smile 四日市」の特設ページにて、ご覧いただけます。⇒



## 三重県警察本部から感謝状を受けました

3月14日（水）、本学学生の平野智也さん（環境情報学部2年）が、三重県警察本部生活安全部少年課長の感謝状を受けた。これは、三重県警が実施する「若樞サポーター」のボランティア活動に年間を通じて参加し、活躍した貢献に対するものだ。若樞サポーターの活動内容は、「少年の立ち直り」「非行防止・健全育成活動に関する諸活動」で、さまざまな形で犯罪に巻き込まれてしまった青少年の立ち直りを目的として、継続的に実施されている。平野さんは、非行防止教室や津駅前での挨拶運動などに積極的に参加し、年間を通して活動に従事し、「講師」として発表する機会もあった。

感謝状は、県警本部生活安全部少年課長の前川様が本学までお越しください、本人に直接手渡された。今後もボランティアセンターでは、地域の活動と学生をつなぐ役割を担い、学生にさまざまな体験ができるよう支援していく。



## 尾鷲の火力発電所などを見学

2月2日（金）、本学環境情報学部の武本行正教授、城之内忠正教授、千葉賢教授、高橋正昭元教授とゼミの学生ら28人が尾鷲火力発電所などを見学した。はじめに、尾鷲にある中電でも最古参の尾鷲三田火力発電所を訪問し、1号発電機（運転休止中）と3号発電機（出力50万kwh、ここ数年は年に10数日稼働のみ）や港湾施設、重油と原油の貯蔵タンクなどの港湾施設を見学した。

午後は、宮川の三瀬谷にある昭和42年に建設された三瀬谷発電所を訪問し、附属の中電・三重水力センターで県内17水力発電所を一括管理している状況についての説明を受けた。ここでは、明治40年に稼働開始した菰野町の千草発電所（国内で2番目に古い）も遠隔管理している。集中管理の結果、大杉谷上流部にある宮川第3水力発電所は、三重県企業庁の管理時代には太平洋側の紀北町から林道経由で行くしか方法がなく、冬季は管理人が越冬宿泊していたが、中電に移管された現在は点検に数か月に1回行くだけで良くなったとのことであった。

最後に、多気バイオパワー発電所を見学した。発電機は6,750kwで2016年6月より運転開始し、年間75,000トンの木材チップを原料として使用している。木材チップの原料は国産材にこだわっており、間伐材や工事で伐採された木材、ダムの流木、製品加工時の残材などで、建設廃材はいろいろなものを含むため、使用していないとのことだ（木材の産地は三重県が41%で、岐阜・和歌山・奈良・長野・滋賀県からも調達している）。参加した学生にとっては、これからのエネルギー問題と、環境問題との関わりを理解する上で、大変貴重な機会となった。例えば、太陽光発電量が増えたことで、火力や水力発電所が発電調整をしており、必要な時だけ発電したり、発電を夕方から開始したりするなど工夫されていることを学んだ。



## わかもの学会と地域連携フォーラムを同日開催

2月3日（土）、「第4回わかもの学会」と「第3回地域連携フォーラム」の2つのイベントが同日開催された。午前中に行われた「第4回わかもの学会」では、本学の3学部から2組ずつ選出された学生代表者が、自分の行った研究活動や地域活動についてプレゼンテーションを行い、会場から質問を受け付けた。

日本の自動車メーカーの経営状況を比較した研究や、温泉水を使用して育てたトマトの糖度調査、学内で録音した自然の音だけで構成した学歌の制作など、多様な発表が行われ、会場からは「温泉トマトのブランド化は、今後、どうする予定か？」など多くの質問をいただいた。

----(最優秀発表および優秀発表紹介)-----

最優秀発表 伊藤旭人（環境情報学部4年）  
『亀山温泉「白鳥の湯」を用いた  
新しい地域ブランドトマト創出への挑戦』

この発表の関連記事『1人1プロジェクト  
「温泉資源活用ブランドトマト創出」が注目  
されています』は、こちらのページにて  
ご覧いただけます。⇒



優秀発表 中川真優（環境情報学部4年）  
『四日市大学 学歌の録音  
～学内の音をサンプリングして～』

この発表を含む、環境情報学部（メディア）の  
卒業発表作品動画は、  
こちらのページ（下部）にて  
ご確認ください⇒



わかもの学会に続いて、午後からは「地域連携フォーラム」が行なわれた。岩崎恭典学長の挨拶で始まり、本学の特定プロジェクト研究の報告に加え、「産業振興」または「人材育成」をテーマにした全6発表が行われた。そのうち4発表は、公募により選出された地域の方の発表で、四日市港の夜景クルーズや、子どもの貧困をテーマに活動する市民団体などが日々の取組内容を説明された。

その後は、テーマに分かれてディスカッションを行い、この地域をより住みやすく、多くの人が訪れるまちにしていけるために、どのような方策が必要かについて意見が交わされた。ディスカッション後は、松井真理子副学長が挨拶し、「地域のために大学ができることは何であるのか、COC事業をきっかけのひとつとして、引き続き検討し、役割を果たしたい」という内容で閉会した。多くの方にご来場賜り、多くの方のご協力をいただき、意義深い一日となった。



## 十四川、海蔵川および竹谷川を調査

2月16日（金）と20日（火）、武本行正教授（環境情報学部）と高橋正昭元教授、ゼミ生らが十四川および海蔵川の本支流と上流の竹谷川・大口川を調査した。富田地区の十四川は7年ほど前から十四川を守る会と共同で調査しており、今回は、冬の導水期では、北いかるが町で朝明川からの流入水があり、流量はやや多めであった。中流部では、家庭排水や田畑からの流出水があり、有機汚濁が認められ、COD（化学的酸素要求量）値は高めであった。海蔵川は5年前から下流と中流で継続調査しており、一昨年度調査依頼があった上流側も追加して行われている。

海蔵川上流の大口川（菰野町）にある養豚場や竹谷川上流の県地区の養豚場からの排水が水系の汚染を起こしていることから、県地区市民センターの矢田館長や竹谷川の蜚と桜を守る会と共同で調査を実施している。この県地区では、高濃度の畜産排水有機汚濁のため、蜚が減少したり、稲作が被害を受け、早急に対策が必要となっている。夏には台風で稲が倒伏する被害がでており、かつ水田は富栄養の状態になっており、施肥がいらぬそうだ。ちなみに、窒素分を表わすNO3（硝酸）値やNH4（アンモニウム）値は、高濃度であった。